

青木！ショート連覇

木村佳司

2004年度よりインカレが変わる。これに伴ってインカレショート大会は無くなる。最後のインカレショート大会を飾ったのは青木（東京大学）と姫野（東北大学）だった。

男子選手権決勝上位

| | | | |
|---------|---------|------|---|
| 1 青木博人 | 0:29:53 | 東京 | 4 |
| 2 小熊武彦 | 0:30:01 | 東京 | 4 |
| 3 川上崇史 | 0:30:05 | 慶應義塾 | 3 |
| 4 堀江守弘 | 0:31:01 | 東北 | 4 |
| 5 久野雄介 | 0:32:14 | 東京 | 4 |
| 6 櫻本信一郎 | 0:32:27 | 東北 | 4 |

女子選手権決勝上位

| | | | |
|---------|---------|------|---|
| 1 姫野祐子 | 0:25:21 | 東北 | 4 |
| 2 大塚泰恵 | 0:26:47 | 金沢 | 4 |
| 3 原直子 | 0:27:22 | 東京女子 | 2 |
| 4 浅井千穂 | 0:27:23 | 京都 | 4 |
| 5 高野麻記子 | 0:27:52 | 筑波 | 4 |
| 6 下村佳奈 | 0:28:54 | 岩手 | 3 |



ショート2連覇を達成した青木
 写真は2002年菅平ショート時の力走

ラップ解析を見ると巡航速度は飛びぬけて速くないものの、非常に安定したレース運びで唯一30分を切るタイムを叩き出し、2位に8秒差のトップに輝いた。

3位に入った川上や8位の楠本はスピードがあり、序盤ではレースを支配する。そのままいけば優勝が見えるのだがミスで沈んでいる。ショート競技の怖さがここにある。

東京大学は優勝を含め、表彰台3/6を占めた。表彰台は東京大学と東北大学のためにあったように見える。いくら開催地が栃木とは言え、東海、関西、北信越、中九四学連の学生には今後さらなる奮起を期待したい。

女子・姫野ダントツ

女子決勝にて、2位を1分以上引き離すダントツの強さを見せたのは、東北大学の姫野。ラップ解析をみても巡航速度・ミス率ともに他の選手から一歩リードしている。

女子の場合は上位選手がさまざまな地区学連から出ており、地域別には戦国時代の様相となっている。

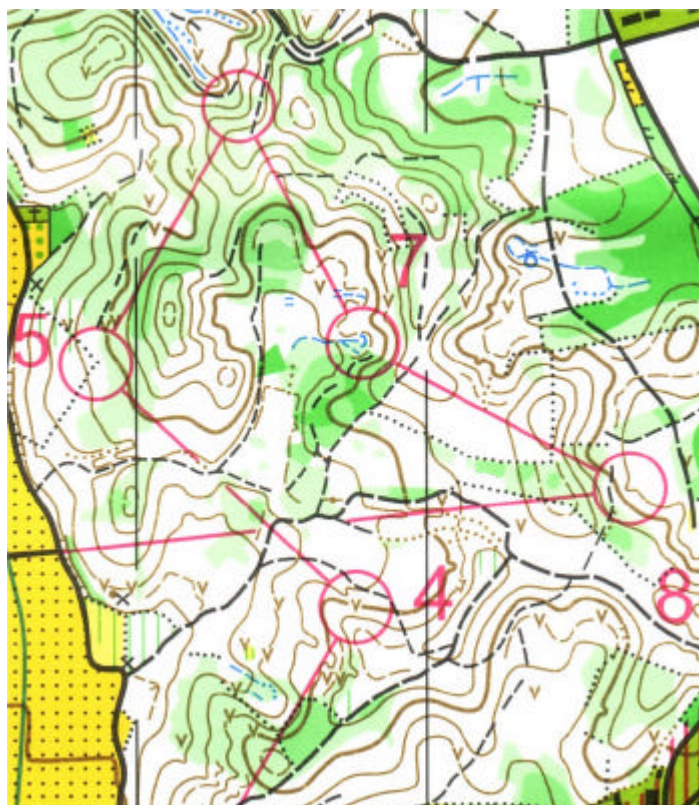
(木村佳司)

男子・青木2連覇

菅平高原にて前回行われたインカレショート大会に続いて、男子選手権を青木（東京）が制した。



姫野祐子（東北大学4年）
 (写真は東日本大会2003で撮影)



男子選手権決勝コースの一部。
 走行可能な森と微地形の中、スピードが問われる。
 地図名は「ししおや」

感動のお裾分け

最後インカレショート大会。時代の節目の舞台を作り上げた実行委員長・宮佐俊佑にその感想を聞いた。大会を作るのは大変な作業だが、そこで得られるモノもまた多い。



インカレショート2003 マスコットキャラクター。宮佐氏がモデルとなっていると言われている。

インカレっていいものだ

約1年半前の矢板インカレをスタートチーフとして手伝わせて頂いた時、スタート前の何とも言えない緊張感、学生の真剣な顔つきに感動しっぱなしでした。インカレってやっぱりいいものだなあと運営して改めて思った。そして終了後、再度この感動を身近で味わいと欲求、また、自分が運営者として得た感動を、若いOBの方々にも味わって貰いたいとの思いが湧き上がり、この役職を引き受けることにした。

上記がきっかけだった為、もちろん学生に最高の舞台を提供することが使命だとは思ったが、その一方で、若い学生OBオリエンティアに実行委員としてインカレを楽しんで欲しいとの強い思いもあった。そのような理由から、運営者集めでは優先して若者を集めるよう心掛けた。

その際に感じたのが、運営を引き受ける層は大半が学生の時にインカレで活躍した人が学連関係の仕事をしている人達であった。私もそうだったが、インカレ実行委員会は、とても敷居の

高い集団であるようなイメージが特に学生の間にはある気がする。単なるイベント好き、様々な人達との交流を持ちたい人など、より様々な人に参加して欲しいと思う。そういった様々な価値観を持った人達がいてこそ、インカレを盛り上げる面白いアイデアが生まれてくると思う。

交流とアイデア

大学や地域クラブが主体の大会と違って、運営者が各地に散らばっていることはインカレ実行委員会の特徴の一つである。そのような集団にとって、顔を合わせる試走会は貴重な時間であった。

昼は試走、夜はミーティング、深夜までの飲み会とフル稼働した。私は試走、ミーティングと共に飲み会もかなり重視した。単に飲み好きというところもあったが、そのような交流を通して実行委員同士が様々なアイデアを出せればとの思いもあった。

ちなみにマップ名である『シしおや(読み方:星ふるしおや)』は、マップ内にある宿泊施設:星ふる学校と地元塩谷町が由来であるが、あれも星ふる学校にて宿泊した際に、飲みながらアイデアを出し合って決めたものである。

より魅力的な併設大会を

昨今の学生数の減少により、インカレ単独開催は採算的にかなり厳しいものがあつたため、ICS併設大会とは別に前日にも大会を行うこととした。

一般オリエンティアからすると、インカレは単なる大会のひとつでしかない。もしかすると、学生が走る箇所がマップのメインで、併設大会はその残りになるからつまらなくなる、とお思いの方もいるかもしれない。そのような一般の方々にも如何に魅力的な大会を提供できるか、それはインカレを継続開催するために考えていかなければならないことの一つである。

今回は当初の日程が地元マラソン大会と重なった為に、全日本リレー大会の一週間前に変更となつてしまい、一般参加者にとって厳しい日程となつてしまったのが残念です。

学生よもっと積極的に

主催者としての学生は、はっきり言ってとても消極的だった。実行委員会が当然大会全ての運営を行うものとの考えは論外だが、そうは思っていないでも、より積極的に実行委員会にアプローチして来てても良いのではないかと思った。

それは、会場の後片付けや印刷発行の手伝いといった労働ではなく、このような大会にしたい、こういったことをすればより盛り上がるのではないかと、といったアイデアのことです。

実行委員会からもそのようなヒアリングをすれば良かった、との反省もありますが、是非学生側でも考えて、積極的に働きかけをしていってください。

感動のお裾分け

私は大学3年生の時に筑波大大会の実行委員長をさせて頂きましたが、その時に感じた大会の印象と今回の一番大きな違いは、やはり、単なるオリエンティング大会なのか、各大学毎に競い合う場としての大会なのかだと思う。

出走前の各大学の応援歌、予選結果に対する先輩からの励まし、決勝のゴールレーンに走りこむ選手に涙ながらに伴走する後輩達・・・その一つ一つが、他の大会では得られない大きな感動を呼び起こします。

今回は本部テントという間近にて、その一部を見ることができ、一学生OBとして感動のお裾分けを頂きました。その感動を分けてくれた学生の皆様に本当に感謝したいと思います。

(宮佐俊佑)